道二翁道話六篇 上

拾三

ロ 9
3406
13

序

道二翁道話。浪華八宮生嘗聽道二翁道話。記以成編。既相尋刊行者五篇矣。而八宮生亡。今茲浪華某獲其餘篇。謂道二翁辨道之審。八宮子記之不遺。其

櫻井藏書

故櫻井理行氏
大正十四年十二月廿三日
櫻井ちの氏寄贈

ロ9
3406
13

言易入人耳。故喩世俗甚有功。今欲校此篇。刊以為六篇也。以前書皆有余祖父之題言。价原田氏請余亦序之。余謂編此者己亡。而有人嗣刊者。是足以驗此學之傳弘与翁与生之有勤於此學矣。今此刊成。則可為翁与生賀也。豈啻可為翁与生賀也哉。實可為為此學祖者賀也。然則嗣刻之功。亦豈耿耿哉。若夫翁之言行生卒。則前書悉之。余復何言。

文政七年甲申春

上河精惟一識

道二翁道話六篇巻之上

浪華 八宮齋 輯

むかし〳〵祖父は山へ柴刈に。祖母は川へ洗濯にゆくといふ事あり。是は結構な事で。至極有難い大業を説き結なれど。ツイ子供のいひ安い事にして仕まふて。むつかしう功徳をかくしてゐる。扨いふ事じや。抑此むかしといふものは。何のむかしかうじや考へて御らうじませ。むかし〳〵は不可思議といふ事で。神道では天神七代地神五代のむかし〳〵。祖父祖母は陰陽すなはち伊弉諾伊弉冊の二柱じや。人の心をいざなひ蠢をいざなふみ高

天原に神留りまして。八百萬の神達に神聚に
聚りたまひて。朝より晩まで一切万物の神霊
むれうちにみちたまひ神なり。かるがゆゑ
善は善悪は悪と御成落なされて人欲の私なく
引るものを根の國。底の國へ追放し罪人と申し正
直の誠なるが高天原にて神とあがめまつるといふ
じや。又佛家では此祖父祖母を金剛界胎蔵界とも
いふ。儒道では太極のむすびが一陰一陽の二気を
生じて五行となり。万物生々として今に息まず
其もとは一気動きて天地が出来。其天地がまるうち

御夫婦是ぞはじまり。此ぢい様ばゞ様が一切万物を産ひ
其万物に悉く夫婦あり。草木にも男松あり女松あり。
夫婦有て而後に親子あり兄弟あり君臣あり朋友
あり天子あり将軍あり諸侯あり士農工商あり。順く
陰陽との道備わり。草木國土悉皆ぢい様ばゞ様が
元祖則是熊の根元皆むすびのふしぎから湧出る
ものじや。人の體でも同じ事。目にも陰陽。左はぢい
様右はばゞ様。手にも左れ手はぢい様右の手はばゞ
様。このいざなぎいざなみの二柱天の浮橋是上より
神なりにならせたまひて分けたまひも今日の鏡をとこ

それも此二はしらの御子孫じや。何と結構な血脈じやな
いか皆神孫じやぞへ。去によつて婚礼の義ハ天地の開闢
三千世界の始り天地のあいだの夫婦はじまりハ天の
浮橋じやによつて外の人でない男ハ女がもつ女ハ男
がもつ万世の始り。高砂の尉と姥。こまざらへと帚持て木
陰のちりをかくふよと。私心の塵埃をかき掃ふて誠に
子孫長久の始りじや
相生の松のちぎりかはらねバ幾千代までも住よしの松
千秋万歳の千箱の玉章と祝ふ。此玉が甚だ大切なるものじや
が。此玉をなでまはりもせねバ千箱の玉章なるイヤ落目出るふ

ござりませぬ。此玉ハどんなものじやと千秋万歳と云ふさへ
なく何ぞまじなひにもなるやうにおもふてゐる。扨此玉と
いふも世界の主で有ひ天上じや。天照大神宮釈迦如
来ハ申に及ばず地蔵も毘沙門も此玉をもつて有
おてたすへてござる。なぜなれバ此玉城鬼めがもつて盗とる
じやソコデ又役人を付て摩利支天の韋駄天のと
いふが馬の尾の様な鞭をもつて追つけてござる。まさに此
玉城鬼めが有難ひのなひのといふまけを知りて盗むで
もあるい。ただ此玉は光りがもれぬ故悪さをするに邪广に成
なるじやソコデ鬼めがめつたに隠しをそうして仕舞ハ

らハちもうい所へ捨て仕まひをる。夫が今さみ皆が渡世諸
なさるのじや。此玉がちるうち能く此本心じや。是則道
じや。女み三従の道親大事舅姑大事夫死してそ子に
隨ひ家相続の道一家親類中能くして子孫繁昌する
のを千秋万歳此子若の玉地なるとして此外ニ女の道いない。
此玉を養うもせずみ拘のくむろどの帯やとうろう鬢ニ
孝行してゐる。夫申へむ様がいろいろ出来のじや。去ル年此
夏の比天神祭りに或所の御内義様が結構な衣裳着て
何て夜い天冠の振袖かぶり女子中ら久三中へ丁稚中ら法
出て難波橋へ還御を拝みに行き此ぶ大勢此人立の

中を押合へし合ひ表の方でおまり混乃その下を
たくれて仕まひ。御内儀様一人うろうろして御座るを
いふ事じや。往い道と何でもない事じやけれど。家が一生を
おかま様といふ大事な場所で指する事より思ひがけるへ
笑れ盗が出来ても知れぬ。恐い事じや。まづ女中がさハ
人立の多い所へハおちよしぬやう。御出の所をかくさり
ませ。是が親大事夫大事家大事を忘れて。知りもせぬ
他人へ義理を張る者へ知りもせぬ所へもまくれるのり
するのじや。千箱の玉が失落してゐるゆへ御家断絶のを
かう紙おもいまものじや大事な事じや。どうぞさも玉が出来

しておやせねば出手ぬ吟味して御らうじませ。其根元
はと云へバ。夫を其へ出ることが中分で停つてゐるからなる
ものじや。嫁よんで当分ハ珍らしい女へめつてゐる人㐂
まるかり人の見てゐねばならぬハ耳引より尻まで　より
して尤も中をかいるじや。一生夫を其へ女房に尤もすると
いふ事が何よりのからき事かな行義の悪い伊弉諾の
尊ハらいぞ。又女もいつまでも嫁入して来たときのんで
ゐるハよい。聟様の御気に入て耳引り腮いらふさ
ましてくださるハ相くの縁ひぢやと。よろこんで相
生の始めの心で居ればよい。夫れまでも訓染が基なるに

語つてサア表て出ること嫁を大切にじや。是らの事をくべ
くと思つて紙にきのけるそうな人子孫でも出来ると
親にべらくべくさし出る。終にハ伊弉諾の尊のあるまの
よくなる。是が祖母が山へ柴刈に行く祖父が川へ洗濯
に行大名遠が出来て。御家混乱家内ふく中る。是ぞ天
地でみよざれバ御月様が御日様を羨みつゝ遂に下天を御回り
なさるハ。御日様の光を請て世界を照しまふのじや。御日様
がかくれバ御月様に光りハない。是を御月様が此遠し
なされて此世界を照し給ふ。御自身れ光明の中に居
出台。月天がらりの行道ハ退居な チト 日輪の行道が

まいりてみるといつも中が御発激が出ると。日月顛倒
して此世を常世とおもうたら図辞。是じやによつて
相生れもしめの心かはらねば。末しらみ安ひりのじやみ
よろく夫婦ま別の礼が教へて有る。其嫁へりして来た晩
ハ両方ながら心が改りてあるゆへ正しいものじや。其清浄
な夫人聟様の一言いふ事がなる。其時の一言が一生の守りも
なしらぬる。甚ぎ大切の事じや。其答じやるゆへ生まれつく
出さぬるそので御腹の中が正しい。是ハ嫁への晩ばかり
じやない。誰云人でも目元しさ日ハみな其清浄な。
其時親方が云付さ事ハ一生忘れぬ。大抵大事なもの

じやない。先へ至ると成るといつて後は中の清浄な夫人
始めてのさるのが至と成る。子供兄弟ハ幼がならち人
欲の穢の移ひとれ。教をのるる事ハ一生其身は至と成る。
甚徳様が行る。塩菜抔をるるに塩を先へのるとさらと塩
が利く。是塩が至と成るゆへじや。又塩を跡でのそくまんさが
よい塩の利がわるい菜が至と成るゆへじや。まじやに。よ
つく其正しい嫁への晩に。聟様よりそしみんくの
嫁御へ御挨拶がよすぎ。其嫁御一生心は至と成りて
家を納むる大抵大事のものじやない。其挨拶の仕やう伝授いたし
まうろくどろのでもなろうくれらじませ。其挨拶の仕やうハ

「扨此度ふしぎの御縁で夫婦となりましたる。是全く
天より結びなされたものでござる。天道の御恵み父母の御恩此二人
もない有難いことじや。まづ其に付き おやへ孝を尽さねばならぬ
ことが有る時でござるといふ。其所は神代の始まり
じやによつて。嫁御の務め中が清浄でなくてはならぬ
ならぬ。少しも出入ハならぬ正しいものじや。ハイ〳〵と云
てござる。ソコデ聟殿が別のことでも知つての通り此
宅では両親がある。御年寄のことなれバ。何分につけ
御不自由がちじや。其所を心得て随分気を付ケ
大切にしてくれねバならぬ。此ことを能くいふておく

其ゆゑに手前共ハよく行儀をも正しうせい。
たゞ御両所の御父母を大切にしてくれねバならぬ
其余のことハ大抵知れてあることなれバ。よう〳〵お後
まゝしやうといふのじや。何ゆゑもむつかしいことじやな
い。先此通りにして下さりませうと子孫長久の
基じやから違ひはない。是が聟殿からも子細わけ
をするのじや。則御先祖の御悦び家内繁昌子孫
長久の御祈祷じや。どうぞ末長く下さりませ。
さうと違ひのないことじや。程ふ。さぞ嬉しうござらう
きつとよう〳〵こちらへ移る後先悔む。

何にも跡はなるわいさい。どんなわけじやといふなら遍て勤むるに憚るわけなれじや。細工して仕出したがよい。今夜りしでも勤むるに憚ることなれじや。八文が他みさ買ふて。ふまん昆布まれなと肴にして。御霊前さ奇とさし向ひ。精礼の仕出し。遂まさきじやけれど。ちらとハ利く。随分行儀ふして。拙そうなるみ勤わらく頼む。子細がある学てあるる。御霊前様がハイく何刻りと殺りまし申り是を附笑ふまいぞへ。お申しけるわけならねぞ大事此事じや。親御様の何る御方なれバ。随分親達共大切よ志てまし いひバなされね此るわけを勤めて頼

さいなくつけりし親御のない御方なれバ。こちの内ふても親ふちを孝行が仕たふても。先達て御なりなされたまてハ。どうつても仕やうがないさい。せめてそのかわりふ仏檀の内から御棄じなされね申り。今日より勤め勤めさいりのじや。まづ上此身ハ則父母の遺體なれバ。どふぞ此身を私わしぬ申う人の恨をうけぬ申う。一家親類中睦しして。家業よ無理のないやうにするがせめて御安堵の端ふもなるならじや。どふぞ是程にすれバ。それも勤めてあんさい。そろふも随分気をつけて勤めて居られと相談を寛めるのじや。是が人の道じや直ぐ孝行じや。子孫

繁昌の御利益じや程に。今夜からやりかけてみなさるが
よい。どうぞ遠慮なさるにも及ばぬ事じや。或人大恵
禅師に死だ父母へ孝行の仕やうもあろうと尋ねられし
人がある。大恵の御答に随分仕よい事じや。朝から
晩まで何をするも父の為何事をいふも母の為と
おもふて勤め行ふ事じやと仰せられた。是が有難い御言
じやとおもひ味ふて御らうじませ。結構な御教へ
じや。が然しながら自慢するが親に見せなさる
なられぬぞへ。是程の事は学問せいでも本心知らいで
も出来る事じや。又どなた程愚痴なものでもよいと

悪いのからぬ人といふものもないものじや。又程れたものは
能に知りて生れ付て居られぬに。当分の我勝手につく
に引かれて。悪ひと知りながら無理に押て勤るゆへ
なるゆへが何ぞもある。是を名づけて横着ものといふ。皆
仏檀から泣てござるぞ。折角成仏なされても親御様
がら紙文呼出してならぬそれにおちるのじや。勿躰ない
事じやないか。皆様が御すきなされた事じや。礼も天理の節
文といふもの。治国平天下れ大用なるいふ天地の御
為なりじや。又不徳な国家兵乱の基といふ。世界の
勝動を引るおそろしものじや。去によりて。聖人神仏は

國家に不礼不義のないやうにと皆お世話なさるのじや。其
御恩の中に路まれて居ながら。いかに我勝手がよいとて
人の恩義も。かまいねといふやうな不礼がどこにあらう
ものぞ。皆天地の道を忘れたものぢや。祖父ハ川へ柴刈に行。
祖母が山へ洗濯に行やうなもので。無方なげな何ごとも
わからぬ。
聖徳太子の傳記に。人事の上に於てもなく聖徳盛なれバ
山川海濱までも恩澤が蒙らぬといふ事なし。況や人穀
草木禽獸に於てをやといふり。又一念私心を發すれ
バ忽ち乾坤を恥らしむるといふてある。然れバ今の一

念によつて生ながら生死変るといふものじや。どのやうな
ものであるぞ。もとが分かあく烏がちらしいふやうな
ものぞ。かうしたものになる。あらゆる肉も近頃ハ商賣
も繁昌して。仕合がよいと申すが。息子殿が出てゐる
といふものじや。親父殿ハ一分でも銭金を溜めしく
きられど。母親ハ年中鄙な素倉へ引出してござる。
又嫁御ハ素直に家へ知らして人をかへると泣てござる。まで
家内が商賣上ならく。はじまるひの御祈祷のしとりて
ふらしてゐる何とかうしたものになりましょ。そう
是ハ真実の勤まられぬらじや。無ひもせねものとなる結

惑してくるしむのと。有るが上にも欲がつく。泣ずがり
かり世間へゑひまけして。内證ではホシくしてゐる大
なる違ひ。是我とつくりと我心に立帰りくしてるがよい。
大抵なづうしいそのじやない。却て子孫長久どころじや
ない。追付欠落分散の御祈禱しているのじや。皆御先
祖が泣てござる。人も腹の中にちつと恥しいと思ふ
ものがなかれば人じやない。不動の火焔も縛の縄も文
殊の利剣も向ふのではない。皆こちの腹の中の悪
魔を降伏なさるのじや。悪魔といふて何ぞこうした惑
のものが。大きな目でもむいて窓から白眼ように思ふて

ゐるが。そんなものじやない。悪魔は明る間をねらうて。
銘々商賣でも仕事でもしてゐる内證家をさまたぐる事
して其ほど間を瞷く。其がなくなるじや。又平常でも私
心の働いてゐる所は。其程悪魔しやるがなくといふ事
じや。其の文字の上で悪魔外道といふ。外道とは外の
ものゝ。我に迷ふ道でもない事小骨折て外に掛
きる人がある。是我外道といふ。此家商賣でもないず
に大きな骨折てゐるものがあるんぞもなきものじや。碁
将棊は勿論なるひは浄瑠理三線身ぶり物まね○など。
其など商賣の間を瞷く。なくなるじや。浄るりなどは

上手なひとのもちがへ大きイ。下手のもち方はのちが小サイ。まづちよつとかいる所がある。或人の狂歌に

町人の藝はへたこそ上手なれ上手になれば家がつぶるる

役者や女郎が髪と形をかざり。衣裳に張せんで粧ひかざるは。あの衆の商賣今日の身過ぎじや。是はその商賣でもない人が。同じやうに衣裳をかざり飾るは何の事じやぞ。又女中方など。髪形から衣裳の身のむき迄。さつきり女郎役者の真似して。化粧の事など教へしてさまれ生るゝは何を目あてに出来さすのぞどうも合点のゆかぬものじや。皆是が外道をかせぐと云ふので

其業が積りくて妻鬼となりそうかぶり付かれ。悪魔が魅入ますといふ。不動の火焔もそのやうな悪魔は寄せ付ぬのじや。文殊の利剣も外道をたちきる為じや。皆腹の中の事じや。とつくりと考へてごらうじませ。善悪邪正佛魔一如といふてある。是が此世の中の事じやといふ事がわ目が覚ましよう。親は孝主人様へは信心。佛壇へも信心なされませ。是まで勝手不忠不孝の科を懺悔しなさい。今が私の帳を消してもらひなさいませ。なまつらくわなては大抵損をするじやる。非倫な業が積りくて罪が勝く重ふなると。切ても突ても煮ても焼ても。頭が引けず

箕で簸ても。算用の出来ぬやうになる恐ろしいものじや。爪の
垢ほど内にあらバ懺悔して仕舞ふが徳じや。過ちて改むるに憚
るなかれ。親御様の御悦びハどのやうなものでござるぞ。我
子のなさる一念が。臨終正念の御利益じや。親の臨終正
念の妨げするものハ誰じやぞ。悪魔どもが居るものぞ。身に
立帰りて御工夫なさりませ。どなたさまも此席にござるお方々。
因縁ずくで有るに懺悔して悪い心の慢を消してしまふと共
でござるけれど。門口迄出るがさいご悪魔がとりつく外道へ足
をとられ引かされて御迷ひなさりまするぞ。丁ど蛇を竹の筒へ
入るやうなもので。竹の筒の中へ入るおりは真直ぐに成て

ゐるけれど。竹の筒を出たがさいご。直にぬらくらする。
竹の筒を教じや則道じや。此竹の筒がはずれまいぞや。
ちつと窮屈なれど徳の内に遠のいて居さへすりや。悪
魔外道の気づかひハない。親御様への孝養が済と天道様
からよいやうにしてくださるゝ。あるひハ次第で助りめいて居
られまいぞ。△此前大和の山奥に。喜次郎といふて山
かせぎをする人が有た。夫婦に子供が二人家内五人で。
わびしくの其日ぐらしなれども。毎朝早く七ツ時より起て
天を拝し地に拝し。今日も又天道様より喜次郎
不幸福を降し給はる。物く育てなさると。抵頭平身

涙を流し礼拝なさるゝが毎朝くれますじや。其女房がいふる
さハ気ハ違ひハせぬか毎日〳〵其方ハ天から福をと下
さるといふて悦んで居らるゝが。何日幸福を貰ふてきますが
何ぞ。親子夫人が幾朝夕も。其といふのハ何んの事
もなく。粟稗のたぐひより風味知らぬ。身にハちがふてまし
しのりのさへろくに能喰ず。日がな一日子供に追ひ
廻され。何日一日やれ嬉しやと安心する事もない。毎日〳〵
天より福が下さるといふて。有難がつて居る其幸福ハ
どこにあるぞ。其次第で揃て其方ハ天の御冥加を
知らぬ故からのじやが。先其方ハ御公家様から嫁入

して来らるゝ。但し御大名様方の御娘御でも有るか知れぬ
ど知らぬなされたのじや。夫とも御屋敷の娘御であるさ
が今日落ぶれて。此有様なさる其悔も何のうらみじやが。
なるで我と同じ山猿の娘じやなら。内に居ても其通りで
何ぶも別によかろうさするハない。夫にまア其方が大若さ
分辨するいふをいふ。先今日の有難ひすりやいふて喜ぶべう。
先此亭が一日頼ふら。そちが一日寝ころしてよい。己人の子
供が忽ち飢に及ぶ。スリヤどちらが頼ふても大抵難義なれ
なくやるい。夫は今日夫婦が達者で。親子五人が飢凍
もせぬ。此中なる有難ひ幸福がどこに有るので。是則天

より降し給ひし幸福でござる。何でもかでも大きに
女房がありさへすればよいのじや。銭がなければ山奥に住んで食物は
黍稗より外のものは知らぬ程。身にまとふものは木の葉
衣の仙人なるも、賤しい山賊でも、今日の冥加を知り
て足納をすれば極楽世界じや。此足納をせねば銭金も
学問もあるほど何にも出来ることじや。夫を知らずに欲深く
の御飯が居へ使へらるゝ。身に着るものは何くの物着て。
夫で足納を知せねば、よしやどれほど不自由な生涯とても
ものじや。皆向ふへ送りやうにして、家業分不相応の
内証を居ることを考へて居るがよい。まるで其くの銘々

ども此身に何ぞの徳があらうぞならう一寸の此骸に幾らもなく
悪魔らくがよろしからうと思ひ給はしら
かゝるは衣類や手道具に虫のつく事なものじや。仕廻は
気ものが肝症で身を殺す。皆悪の曲るものじや。△或所の家
札に人として人面獣心の癖をもつをは心の
あらんよう御札じや。結構な御守。平生此御札を懐中
して今日此災厄を遁る中の心懸が肝要じや。

道二翁道話六篇巻之上終